

研究代表者 所属・職：経済学部・教授

氏 名：遠藤 秀紀

研究課題名：金融リテラシーに対する自信過剰が住宅ローンの理解と選択に与える影響

研究の概要

住宅ローン選択などの金融行動は、高い金融リテラシーを取得することで改善できると期待されてきた。しかし、自信の金融リテラシーへの過大評価が金融の基本的な知識の軽視などと相まって機能すると、培ったリテラシーを十分に発揮することが困難になることが多くの研究で指摘されている。しかし、金融リテラシーへの過大評価が住宅ローンの理解などに与える影響を検証した研究は、筆者の知る限り希少である。そこで、本研究では金融リテラシーに対する過大評価が住宅ローンの保有状況に与える影響を検証した。

なお、金融リテラシー指標は複数の質問項目を集計し、スコア化したもの（金融リテラシースコア）を用いた。多くの先行研究では単一の指標を用いているが、採択する質問項目が異なることによる分析結果のばらつきが指摘される。本研究では、Houts and Knoll (2019) で示された指標の短縮版を採択し、他の先行研究で扱われる複数の指標を補助的に用いて分析結果の頑健性を適宜確認した。

達成状況・成果内容

分析基盤となるアンケート調査の設計を見直したため、調査開始が予定より後ろ倒しとなった。そのため、論文投稿などは年度内の実施ができなかった。実施した調査と現時点で得られた結果は以下の通りである。

【アンケート調査の実施】

日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査を経て実施した。

パーソナルファイナンスに関する基礎調査 2022-2023

実施方法：インターネット調査

実施期間：2023年2月21日～24日

調査対象：日本に在住する18～69歳男女

回収数：2013名

【金融リテラシーを過大評価する者の傾向】

金融リテラシーを過大評価する者（計測された金融リテラシースコアに対して自己評価が過剰に高い者）は、高スコアかつ自己評価も高い者に比べて家計管理への自信は低く、家計管理は同居者を頼りにする傾向が示唆された。また、金融リテラシーを過大評価する者は、高スコアかつ自己評価も高い者に比べて、長期的な視野での貯蓄意識が弱いことが確認された。なお、同居者などの第三者に家計管理を頼る傾向のある者ほど住宅ローンに対する返済の見通しが甘いことも示唆された。